

流芳後世  
長壽於人

真

419

特259

339



始



凡 例



一、長岡田書齋にして、後世尙ほ傳ふべき人材、濟々なれども、本篇は其の一部を採  
り。  
二、忽如の間、而も短期に編纂したるを以て、遺漏、杜撰鮮からざるべし。

三、略傳非列は五十音の順とせり。

一、敬稱は一切省略せり。



特259  
339



—序に代へて—

## 長岡の沿革

長岡の發祥、詳ならざれども、沮洳の時代永かりしもの如し。中古藏王神社を中心し聚落ありしが、長尾氏領するに及び藏王堂城を中心し衢肆を成せり。元和三年堀丹後守直寄、上田郷坂戸城より移封せられ來りしが、信濃川の缺壞太しく藏王堂城危迫せるを以て、神田安善寺に假寓し、地を長岡にトし築城の工に掛りしが、未だ成らざるに翌四年村上に移され、代りに牧野忠成、頸城長峯より來り、爾來三百年の居城として北越に睨臨せり。廬山に入るもの廬山の大を識らず。戊辰の役に會し、長岡藩、公武合體の爲、極力努めしも、大勢如何ともなす能はず、會々要路に人を得、銳意藩政の改新





鶉 殿 春 風

通稱團次郎。春風と號す。長岡藩士にして幕府に仕ふ。

戊辰役、長岡藩叢爾小藩を以て、薩長の精銳に拒抗し、總督河井繼之助藩兵を率ゐ、英名烜赫たるものありしが、猶ほ若くして春風あるあり。

春風、才氣卓然、夙に英蘭の學を修め、海外の事情に精し、其の才、航海造船の事に用ふるところありしに、不幸短命、卓識達成せざるを惜むもの多し。

春風、幼時群童と遊び、雪を投じて相戦ふ、春風即ち高所に登りて、鶉殿團次郎これに在りと大聲し味方を督し、毎戦皆な捷つ。斯く幼にして精敏頭角を現す。春風、良師なく、獨學獨修、屹々倦まず、竟に航海測地の術、奥を究む。

春風の友、加藤弘之、大鳥圭介等皆な當世の名流なり、殊に勝海舟と親善、蕃書調所の教授となり、更に監察となりしは、専ら海舟の薦に因る。海舟、春風の碑文を選し、

(前略) 君天保二卯年正月に生る、いとけなきより巍然として群兒にことなり、長に及て其

志思ますます大なり、東都に来て西洋の學を修め、つとに其要を得たり、文久二年三月蕃書  
 調所教授にあげられ、同年幕府召て祿幾許を給ふ、慶應戊辰の際、目付の列に擧られ、其の  
 言をさかる、しばし官軍に使し君命を辱しめず、五月疾を得、其の任に堪へざるを以て、  
 故國に歸り、同年十二月九日終に長岡にて病歿す、年三十八。嗚呼天君がとしを短し、其才、  
 學をして世に伴しめざるはそも命歟、識者甚だこれを惜む。

又薩人伊東祐享（後元帥海軍大將 勳一等功一級）戊辰役前、長岡に來り、春風に師事せしは既に人の知れるところ  
 にして、祐享曰く、我の今日あるは皆春風先生の賜なり、と、亦以て爲人を想ふべし。

### 小野塚 喜平次

小野塚平吉長子、明治三年十二月二十一日生る。

北越の生める學者、多くは力を文史に専らにして經世に及ばず、其の造詣精核、喜平次の如きは  
 絶えて無くして僅に有る者。

少うして學を好む、卓異の才と、淵源の學とを以て最高學府東京帝國大學總長として、令名噴々  
 學界の望を負ふこと七年、貴族院議員に勅選せられ、後進子弟を善誘す。喜平次又講學餘事尤も善  
 く文を屬し、經世家たるの聲望あり。

喜平次、明治二十八年東京帝國大學法科を出で、孜孜矻々研鑽に力め、専ら政治學及び社會學を  
 攻究し、東京帝國大學法科教授となり、尋で同部長に昇進、更に總長に榮進し、一意提誘せるなり。  
 昭和十年十月帝國學士院第一部々長に推され今日に至る。

### 大橋 佐平

幼名熊吉。渡邊又七の二男。後姓を大橋と改む。

近時、北越の貨殖の才を論ずるもの、佐平を推して巨擘と爲す。佐平爲人倜儻。長岡洋學校の  
 創立に參劃し、郵便局、通運會社、渡船等の各種交通事業に専念したりしが、明治十四年越佐毎日  
 新聞社を創設し、地方文化革新に、産を傾け奔走せり。

當時、志士争つて自由民権の説を唱ふ、猶ほ幕末志士の尊攘を唱へしが如し、一は中興の偉業を成し、一は立憲の鴻謨を熙む、皆な基は一なり。佐平偶々一日、彌彦に鈴木昌司、山際七司等と相會せり。宴に移り、山際曰く、國家の爲なりせば、祖先傳來の家、何ものぞ、と傲然たり。佐平凜然として、國の爲、家は固より生命亦捧ぐるもの鮮しとせず、而し徒らに祖先の家を潰滅せしむるを以て、志士の本分なるが如く曲解するは愚の極なり、と大喝せり、亦爲人を識るべきなり。

佐平の壯時を觀るに、時流に先んじ、絶えず新事業を劃策し、時に成功あり、蹉跌ありて波瀾に富みしが、不羈の性に因るところ、漸く轆軻不遇の境に至れり。而して決するところあり、明治十年越佐毎日新聞社の經營を嗣子新太郎に委ね、單身上京、博文館を興す、好期に投じ業務騰天の勢運を際せり。尋で歐米を漫游し、歸來畫策敢て身を安んせず。明治三十四年大橋圖書館の創設を志し、工未だ成らずして逝く、六十七歳。

## 大橋新太郎

大橋佐平の長子。文久三年七月十九日出生。

徳富蘇峰嘗て人に語りて曰く、

佐平が成功の因は、他なし、實に新太郎にあるなり。乃父の創めたる事業は、盡く整理擴張せり、恰も徳川家康に於ける秀忠、家光のあるありて、徳川三百年の礎を成せるが如く、新太郎周到の思慮と、邁進の勇氣とを以て、乃父の事業を繼承し、今日の盛大を招來せり。言、蓋し溢美に非ず。

新太郎、精敏既にして出藍の譽あり。夙に同人社に學び研學。佐平と俱に越佐毎日新聞社經營の衝に當り、後東都に出で、善く佐平を扶け、博文館の盛大を招じ、出版界の巨材たり。大正十五年亡父の遺志を繼ぎ、巨費を投じ、震災にて焼失したりし大橋圖書館を九段下に復興し、藏書十數萬を有する、私立圖書館中の白眉たらしむ。是より先、大正八年大橋育英會を興し、人材の育英に力を致し、同十年英米訪問實業團を組織し、歐米各國を巡遊し、具に彼の地を視察し、歸朝するや日



本經濟界に其の粹を移せり。大正十五年貴族院議員に勅選せられ、又東京商工會議所特別議員に推され、現に同顧問たるの外各會社に重きを成し、斯界に雄飛するところあり。

## 小原直

田中敬治郎二男。明治十年一月生る。

直、天資卓犖、卯角已に群兒と異れり。長岡中學校に學び、小原朝忠に養はれるや、東京共立中學校に入り、尋で第一高等學校、東京帝國大學英法科にて覃研精究數年、業成るや司法官試補を初めとし、明治三十七年判事に任じ、尋で千葉地方同區東京區、同地方各裁判所檢事を經、司法省參事官に任じ、更に檢事となり、横濱、東京各地方裁判所檢事正、長崎控訴院檢事長に歴補し、昭和三年四月司法次官に榮進、次で六月十二日判事に轉じ、東京控訴院長に補せられしが、九年七月に至り岡田内閣の司法大臣に親任せられ、越四人目の大臣として毅然局に當りて、能く公事を理す、昭和十三年三月職を辭し、同七月に貴族院議員に勅選せられしが、十四年八月阿部内閣の成るや再

び内務大臣兼厚生大臣として國政を處し、才名藉々、一時に傾動せり。

## 河井蒼龍窟

通稱繼之助、蒼龍窟と號す。長岡藩執政。

繼之助、幼にして豪放、十七歲鷄を割きて、陽明を祭り、軒然立志を誓明したり。嘉永六年の春二十五歳にして初めて江戸に遊び、齋藤拙堂の門に入り、後、古賀謹堂の久敬舎を訪れ、切磋力む二十八歳の時、評定方隨役目付同格に拔擢せられしも、老臣と相容れず、幾もなくして、職を辭し江戸に出で、再び久敬舎に入り、翌安政六年關西に遊び、山田方谷に従遊し、經濟實用の學を體得せり、從遊凡そ一年、其の間長崎に遊び、蚤に外情を探りて歸藩せり。

繼之助の藩政に志を得たるは、郡奉行に登用せられし後にして、實に元治元年三十八の時なり。尋で慶應二年十一月郡奉行兼番頭格町奉行に、同三年一月町奉行兼評定役寄合組合に、更に同年二月奉行役加判列座に進み、次で家老となり、家老上席、遂に總督に累進せり。

八  
繼之助、慨然藩事を以て自ら任じ、庶政を總括し、決流るゝが如し、苟も藩に益あるもの知るとして爲さざる無く、手當檢見の法を廢し、糠藁を納るゝの法を更めて、值金に替へ、懲役の法を創め、囚徒をして頰衣執役せしめ、或は戸籍を嚴にし、人口を査するが如き、或は藩財政の根本的整理、武器の充實、學制改革に、藩政の宿弊を痛除すると俱に、更に祿高の大改正等、其の事功頗る見るべきものあり。

戊辰の亂起るや、臂を攘て蹶起し、會桑諸藩と連盟して、薩長軍に抗戦する八旬、七月二十五日を以て長岡城を恢復し、驍名を馳す。不幸にして身に重傷を負ひ、復た事を視る能はず、輜に扶けられて會津に赴く途中、八月十六日竟に會津鹽澤村に歿す、歳四十二。

### 草生政恒

幼名錦造、長じて政恒と改む。藩士草生物藏の第二子。

軍に仕へ將たるもの海に山本五十六あり、陸に柳野殿あり、又草生政恒あるあり。

政恒、則ち編者の姻亞なり。爲人耿介にして氣節を負ひ、屹々困學精勵、軍に志し、明治十四年陸軍教導團に入りしが、此の間維新に會し、舍屋灰燼に歸し、爲に政恒徒弟となり、夜店に出で唯力勉、明治十七年憧憬の陸軍士官學校に學ぶを得、孜々營々、更に陸軍大學に於て研學。業終るや日清、北清、日露戰爭に参加し聲績赫々たりしが、明治四十五年旅團長を最後として現役を退けり。政恒の兄鉄樵、繪事を以て職と爲す。鉄樵、特に士流の爲に重んぜられしものは、其の技の巧なるに因ると雖も、蓋し其の人にあり。鉄樵、爲人蕭散開放、自ら世俗に背きて、一生を終る。また長岡の生める巨匠と謂はん乎。

### 小西信八

長岡藩士小西善碩二男。長兄天世せしを以て、家督を襲ぐ。

信八、資性溫厚にして着實。少うして好學、明治三年藩士田中春回の蓋簪義塾に入り漢學、洋算を研學。明治八年笈を負ひ、東都に遊び、共學舎の門衛となり、孜々業を肄ひ、膏を以て晷に繼ぎ

困苦切磋、同九年四月東京師範學校(東京高等師範學校前身)にて修學。業卒へるや暫く中等教育並に保育に従ひしが、明治十九年盲聾啞者の教育、等閑せらるるを太だ憾み、期する所ありて、惻隱の心、仁の端なりとの聖賢の教を奉じ、敢然悲慘なる不遇者の教育に力を效し、此の間先進地の特殊教育状態を具に視察し、教育の充實並に盲聾啞の福祉増進に一身を捧げ、我が日本特殊教育の先覺者として敬慕せられつゝ、昭和十三年七月五日病歿、歳八十六。

### 小林病翁

字は炳文。通稱虎三郎。初め豊松又は寒翠と號し、晩に病翁と更む。

虎三郎、古學の出なり、古學の弊とするところは、専ら經を講ずるを以て主となし、他書を涉獵するを許さざるに在り、故に往々固陋に陥るの弊あり、虎三郎私に之を嘆じ、經史の他、諸子古家の書を博攻せるを以て、古學派より駁難なりと誹議せられしも、更に超然たり。

嘉永三年藩命を以て江戸に出で、初め萩原綠野の門に入り、次で佐久間象山に従遊し、傍ら蘭學

を攻む。當時象山門中雋才多し、而も虎三郎、吉田松陰と俱に佐久間兩虎と稱せられ、嶄然頭角を現す。象山常に人に語りて曰く、「義卿の膽略、炳文の學識共に稀世の才なり、たゞ事を天下に爲すもの吉田子なるべく、我子を託して教育せしむべきもの小林子なり」と、以て虎三郎の學才を察知すべし。

虎三郎、藩事に就き、繼之助と意見を異にし、屢々争ふ所ありしと雖も、遂に其の志を得ざりき。戊辰役後、藩主忠毅新に立つや、特に虎三郎を起して、大參事に任ず、虎三郎、灰燼の下、士民は流離顛沛の悲境に在りて、爲す所知らざるを深く憂へ、儼然として「食ふこと能はざるが故に教育せん」と、喝破し、長岡をして速に恢興せしめんが爲に、教育を第一義となし、以て士民の嚮ふところを示すと俱に、専心學を興し、政務を統督し、瘡痍を恤み、窮亡を惠み、業を勧め、戦後經營に力を致せり。時に朝廷、虎三郎を徵し、文部省博士を以てすれども、病に移して起たず。明治十年八月二十四日病歿す、歳五十。

長岡の生める明治維新の三傑の一として、今尙敬慕せらるゝも故莫しとせず。

小林 雄七郎

名は雄七郎。字は子英。北陽と號す。

雄七郎、小林虎三郎の弟なり。資性倜儻、尤も泰西の學に深く、兼て文章に長ず。

明治の初め、工部省權助より、陸軍省御用掛を拜命し、伊藤春畝、山縣含雪の二公に知らる、而して意私に之を輕す、獨り大久保甲東に服す。

雄七郎交遊を喜み、中江篤介と交り深し、性又飲を嗜み、興熟すれば、則ち壯語譁辭物を衝きて出で、四座風を生ず。井上馨外務に卿たるや、要職を以て之を遇せんとせしも、又辭して受けず。

一從大鼎屬強秦。六國君臣太苦辛。

休言荆楚無三戸。既見中原逐鹿人。

其の人想ふべし、帝國議會の開設せらるゝや、衆議院議員に推され、將に大いに氣を吐かんとせしに、有毒を病みて明治二十四年四月歿す。歳四十七。その著薩長土肥の一書、見るべきものあり。

小金井 良精

小林雄七郎の外甥、小金井儀翁の第二子なり。良精、安政五年十二月生る。

明治三年東都に出で、大學南校に學び、次で第一學區醫學校に入り、更に東京帝國大學醫學部に醫技を修め、明治十四年獨逸に遊び、柏林大學を訪れ、古今の治法を究め歸朝するや、聘せられて醫科大學教授となり、孜孜懈らず、苟且偷安せず、醫學博士、醫科大學長を拜命し、名聲藉々たり。其の高風清節、眞に學者たるの儀表を示す。

小山 正太郎

先樂と號す。

小山家、世々醫を以て長岡藩に仕へしも、先樂敢て家業を襲がす、明治四年東京に遊び、川上冬

崖の聴香讀書塾に入り、洋書を學ぶ、先樂、天資尤も勝る。

明治六年陸軍兵學寮(今の士官學校)に於て、地圖の製作に當り、後ち圖學教育掛を拜命し、石版印行及び鉛筆畫帳を創む。九年職を辭し、直に大學工學寮の美術學校に入り六法を研修す。業成り、高等師範學校、文部省に出仕し、明治十一年率先學會を新に設け、屢々展覽會を開き、專心洋畫の普及に力を致せり。先樂其の後進を教ふるに啓沃法あり、能く器に因り、材を成し、明治十四年來博覽會、展覽會等の審査員に推され、其の他美術審査委員、東京高等師範學校講師等に歷任し、名聲隆々たり。

坂口五峰曰く、「我邦洋畫、其の正法を傳へしもの、先づ指を先樂に屈す、宜く關山開道の祖と爲すべきなり」と、又過言に非ず。其の受業の士にして、現に家を成すもの中村不折、鹿子木孟郎、小杉未醒、高村眞夫等あり。大正五年一月病歿す、歳五十九。

## 齋藤博

祖父幸彌、長岡藩士。

博、嚴父詳三郎中等學生訓蒙の爲、福岡に在るの時生る。

博、神情明秀、風姿詳雅、夙に語學に堪能。明治四十三年東京帝國大學法科を卒へるや、外邦に使ひし、英米の大使館に勤め、大正十二年紐育總領事に榮進せしが、昭和四年本省に還り、外務省情報部長の重職に就き、尋で英國大使館參事官、和蘭公使を経、八年出淵大使の後を襲ひて、駐米大使として、機微なりし世界情勢に處し、善く君命を辱しめず。昭和十年に至り倫敦會議の開かれるや、若槻全權に隨ひ亦能く日本の眞價を輝赫せしむ。十三年堀内謙介と更迭の命ありしが、未だ歸らざるに、翌十四年二月二十六日ワシントンにて病歿す。時に亞米利加特に軍艦を派し、博が遺骸を鄭重に送り届く、亦其の爲人を識るべし。歳五十四。

菅原時保

菅原權九郎の二男。慶應二年四月出生。明治二十四年分家す。

時保、學徳俱に劬く、世以て洞上近大の一老宗匠と爲す。

時保、少うして薙染す。爲人恬澹克己。一日佛庵に參じて衣鉢を受く、參禪之餘、泊然として、他嗜なし。建長寺住職にして、曩に臨濟宗建長寺派管長として大に宗風を揚げ、其の高風を欽慕する者多し。

柳野嚴

柳野直第二子。明治二十四年一月生る。

越に醫を以て軍に仕へ、現に其の首を爲すもの柳野嚴なりとす。

嚴、資性沈厚にして思慮周密。敏智なる才を以て、阪之上小學校より長岡中學校を經、金澤高等學校に入り刮摩精勵、更に大正五年東京帝國大學醫學部を卒へるや陸軍に奉じ、累進軍醫少將となり。大正十三年より二箇年獨米の先進醫學地に赴き研覈、業既に成るや、命せられて東部軍醫部長として織意毫髪と雖も残さず、令名噴々たり。曩に腦病理學研究に依りて、醫學博士の學位を獲しが、昭和十六年十二月北京に派せられて今日に至る。

野村貞

幼名熊吉。父は萩原要人、世々長岡藩士。十七歳野村氏を襲ぐ。

貞、精悍、膽氣あり。夙に砲術を江川塾に學び、尋で川勝塾、箕作塾にて研修數年。明治戊辰に方り、野砲半隊長として、長岡藩兵を率る勇戦し、戦傷を蒙りしが、明治二年に至り、近藤眞琴の塾に入り更に研學、次で龍驤艦乗組士官に轉じ、翌四年海軍中尉に任せられ、明治二十七年二月高千穂艦長に補せられたり。時に一寓話あり、航海の途次布哇ホノルルに碇泊せしが、一日外人某の

主催にて、高千穂艦長外十數名の士官を聘し、同地名流の男女と晚餐の饗宴を催せり、場内柔弱輕佻の風四座に滿つ、貞、太だ快とせず、宴半ば、卒然上衣を除し、洋袴を脱し、壁に寄るなり、頭を床に、踵を空に、逆起ち、半禿顛を振りて「印旛沼に住む鰻の穴入りなり」と大聲すると見るや、電光の間、軍服を著け、威儀を正せり、座たゞ啞然たり。豪宕なること斯の如し。

同六月、鷄林の風雲急なるを聴き歸航し、征清の役に臨み、黃海海戰に於て、浪速艦と共に赫々たる戦績を收む。

明治二十九年竹敷要港部司令官に補し、海軍少將に陞り常備艦隊司令官、更に三十二年吳鎮守府司令長官に累進せしも、同年五月四日五十五歳にて病歿せり。

## 野本 恭 八 郎

幼名豊治。恭之助と更め、後恭八郎と改む。互尊と號し、又互尊重子、互尊獨士、天爵互尊の別號あり。

恭八郎、嘉永五年十月刈羽郡の名間山口家に生れ、明治五年八月野本理兵衛に養はる。明治八年一月家督を繼ぐ。恭八郎、性名利恬虚。少うして三餘堂に學び、和漢の學を研鑽琢磨せり、長ずるに及び愈々磨礱せらる。恭八郎汎愛を以て終生の業とし、儉德終始渝らず、地方風教の改進に鞠躬力を致し、事に當りては秋霜烈日の如し。八十五歳の一生に於て、特に掲ぐべきもの、則ち互尊文庫の寄附、明治節の首唱、富士山公園の主唱等にして、長岡人士の薰化を蒙りしもの、蓋し鮮からず衆皆な以て其の德に服し、郷關の誇りとす。晩年嗣を絶ち全財産六十餘萬圓を擧げて財團法人日本互尊社を興し、互尊獨尊の本山となし、世道人心の裨益に盡す。昭和十一年十二月四日病歿す。歳八十四。

## 橋 本 圭 三 郎

藩士橋本彌十郎の長子。慶應元年九月出生。明治二十四年家督を相續す。

近時、長岡の生める素封にして、東都に在りて大橋新太郎と、相對するもの橋本圭三郎と爲す。

圭三郎、天籟資性抗爽、身を持するに謹嚴。

明治二十三年東京帝國大學經濟科を卒業するや官界に入り、樞密院書記官、大藏省國債整理局長、主計局長、大藏次官、農商務次官を歴任し、財界勿擾の間に處して紛亂の衝に當り、快刀斷麻、夜以て日に繼ぎ、善く其の健全なるを保持せり。

大正元年貴族院議員に勅選せられしが、これより實業界に轉じ、日本石油、尼崎人造石油の各社長を始め各種の重役を兼ね、隱然新太郎と俱に日本財界に雄飛す。

### 福島 甲子三

名は甲子三、字は成叔、晩晴と號す。

甲子三、藩儒鬼頭少山の第三子。二十五歳にして舊田安侯家臣福島萬吉の後を嗣げり。

資性篤摯誠烈、少うして困苦勵精。明治十六年四月千葉の縣衛生課に出仕するや曰く、吾れ才、學俱になし、唯誠意事に當るのみ、と、専心自治に力を效し、其の誠壹、澁澤榮一、大橋新太郎の

認むるところとなり、東京瓦斯會社支配人に推輓せられ、尋で同取締役に榮進し、同社を辭するや寶田石油會社常務取締役として勉務、越後産業界に貢獻する所太だ大なりしが、辭するに及び徳性を専ら鰥寡に效し、貧窮を救ひ、青少年の教化に力を注ぎ、郷土の啓發に意を用ひ、其の功績顯著なるものあり。甲子三又徳教の振興を慮り、夙に斯文會、長岡孔子祭典會、本郷中學校等を首め、克く私財を散じ、或は樂翁公の高風に私淑し、遺業を研究し、常に遺徳の顯敞に謁し、樂翁公遺徳顯彰會を興し、萬人の稱讚して已まざるものありしが、昭和十五年三月十九日八十三歳を以て病歿す。

### 堀口 九萬一

北越、外交官鮮しとせず、而して芳澤、齋藤、堀口を推して近時の巨擘と爲す。

九萬一、良次右衛門の長男として、慶應元年一月生る。明治二年家督を相續したりしが、爲人精敏、幹才あり。力學衆を超え、業駭々として進む、二十六年東京帝國大學法科を卒へ、外交官補を



初めとし、特命全權公使に累進し、退官後、昭和十年文化使節として、南米諸國に派遣せられ、日本外交上特筆すべきものあり。餘事喜みて和漢の書を読む。

長男大學、國際文化振興會理事にして、文化開發に力を效し、また能く文を屬し、詩を賦し、才名夙に世に著はる。

## 牧野忠篤

幼名十二。華堂又は竹馬と號す。長岡藩第十一代藩主忠恭の第十子。

舊長岡藩、越後の中央に位し、牧野侯提封七萬四千餘石、北越の重鎮たり。藩祖寶性公農を重んじ民を恤み、儉朴自ら率ゐる、忠孝を基となし、「常在戰場」の座右を以て藩士を奨励せしかば、閩藩の士風蔚然として勃興し、三世大淨公尋で起ち、文教を崇び、武術を講じ、士馬精強を以て名あり。幕末に方り、海内多事に會し九世龍德公、英邁の資を以て善く祖業を恢弘し、入りては閣老に榮進し、白河樂翁公と心を協せ、力を幕政の振興に竭し、出で、は京都所司代となりて、會津祐堂

公を佐けて公武の間に走奔し、克く匪躬の節を致せり。明治新政の後、牧野侯華族に列し、子爵を授けられたるなり。明治十一年九月忠恭病歿、兄忠毅(山望)病の故を以て隱退せるを以て、十月二十三日十二家督を襲ぎ、名を忠篤と改む。

忠篤、胸襟豁達、少うして家庭に學び、既に主侯の器あり。二十一歳にして慶應義塾に入り、福澤諭吉の薰陶を受け、士魂商才の奥を研磨す。既に總明の資を以て良傳の啓沃を受け、學業駸々日に進む。明治三十年、二十七歳にして貴族院議員に推され、研究會の審査部委員となり、他日研究會領袖としての地位を礎くに至れり。尋で初代長岡市長として、創業の長岡市政の基礎工作を了し、職を辭し再び貴族院議員として専心國政に力を致し、各間の仲介に勞を注ぎ、其の三十八年間に於ける勳迹特に傳ふ可きもの多し。又大正十一年清浦子爵の後を受け、蠶絲業同業組合中央會長の要職に就き、或は大日本蠶絲會の設立に參劃し、聲名大に噪ぐ。

忠篤性讀書を好み、餘事、書を善くし、茶儀に精しく、書亦能くサリ。昭和十年四月十一日、病歿す、六十五歳。

### 三島億二郎

字は子樂。初め銳次郎、叢軒と號す。本姓伊丹氏を出で、川島氏を嗣ぐ。

億二郎、嘉永六年米艦の相州浦賀に来るや、藩命を以て同地に赴き、備に察看し、次で藩政に就き建議するところありしに、遂に書生、藩政を議するの故を以て、譴を蒙り、歸國を命ぜられ、家祿を減せらる。是より邸内に書堂を建てて、専ら子弟の育英に力めり。

戊辰の役に會すや、億二郎軍事掛として軍議に參じ、各地に轉戦せり。既に長岡城陥ち、明治の新政なるや、京都に赴き、次に東京に到り、名家の恢興に寢食を忘れ東行西走。明治三年柏崎縣大參事に任せられ、手腕を跡し、舊藩士の生業の道を講すべく、政府より授産金の貸付を得んがため其の力を注ぎ、或は長岡學校、阪之上小學校、長岡病院を設立する等、戦後の經營に勵めたり。

後、大區長、古志郡長に歴任したりしが、明治十五年老齡の故を以て職を辭し、鬱滯たる氣を殖民に致し、北海道殖民社を創設せり。

明治二十五年、六十八歳を以て病歿したりしが、其の才、實用を主とし善く謀り、善く斷じ、力

を公益に専らにし、實に今日の長岡の礎たらしむ。

### 山本精義

初の名は義方、藩主忠精の片諱を賜はり、今の名に改む。字は子直。通稱勘右衛門、晩に老迂齋と改め、青城と號す。

精義、幼にして精敏明穎。忠壽、忠周、忠敬、忠利、忠寛、忠精の六代に歴仕し、一藩に重きを爲す、二十二歳にして藩宰の職を襲ぎ、此の間五十餘年、孜々營々藩に竭す。

精義の功實、則ち牧野系譜を修訂し、一藩の舊法及藩士の事功を明にし、悠久山蒼柴神社の經營に參劃し、又明和の凶作に方り、藩財益々困窮せるの時、精義、儉約令を布き、銳意公費を省き、強めて弊政を革め、歳計數年ならずして一新せり。

精義、又、藩の文運草昧なるを憾み、寶曆五年十月自家門の傍に書堂を設け、同志輩を會し、自ら長となりて、文教に力を用ふ。蓋し精義、始め程朱の學に従ひ、後に古學に入る、江戸に在るの

日、伊藤竹里に従ひ、講を聴き、高野榮軒等と俱に切磨せるなり。  
安政四年正月、疾みて歿す、歳七十五。

### 山本帶刀

名は義路。幼名堅三郎、竹塘と號す。

三島毅曰く「名門虚しからず、果して名士を出す」と。山本家甲州武田家臣山本勘助晴行の後裔にして、世々牧野侯の老職たり、門地既に高く、聲望亦熾なり。帶刀、渡邊渡の子、渡は山本氏の孫を以て出で、安田氏を嗣げるなり、山本勘右衛門子なし、帶刀、藩主の命を以て山本家に養はる時に八歳。少うして敏達、蚤に神童の稱あり。

慶應三年三月、養父勘右衛門歿するに及び家を襲ぎ、老職を嗣げり。明治戊辰に際會し、帶刀、大隊長として、防戦頗る力む。幾くもなくして城陥るに及び、殘兵を率ゐて會津に至り、所在轉戦せり、九月四日飯寺村に陣し、偶々薩長の重圍に陥り、遂に宇都宮藩兵に捕はるところとなり、彼

速に降伏を勸むれども、帶刀、儼乎として、吾の抗せるは、王師に非ず、薩長の暴狀に對して報いたるに過ぎず、而も吾は藩主より戰の命を受けしも、まだ降を命せしを聞かずと、抗論屈せず、遂に侍臣と與に従容として死につく、歳僅に二十四。惜しむべし。

### 山本五十六

高野貞吉の六男。明治十七年四月出生。後ち山本家に養はれ、大正五年家督を相續す。

越に於て陸に名を成せるもの鈴木莊六、海に名を得しものに吾が山本五十六あり。

五十六、天稟秀異。明治三十七年海軍兵學校を卒へ、海軍少尉に任じ、昭和十年十一月海軍大將に累進す。此の間海軍大學校を卒業し、霞ヶ浦海軍航空隊附同教頭兼副長として令名ありしが、後米國大使館附武官、五十鈴、赤城各艦長に歴補、昭和四年倫敦海軍會議に全權委員隨員、航空本部技術部長兼海軍技術會議議員、第一航空戰隊司令官、十年に至り航空本部長に補せられ海の荒鷲を育成し、翌年十二月海軍次官、昭和十四年聯合艦隊司令長官兼第一艦隊司令長官に補せられたるな

り。

嘗て、帝國議會の豫算委員會に於て、一議員ありて、帝國空軍に關し質して、海軍航空隊の技を云々せり、時に政府委員たりし五十六、慨然として曰く、我が海軍航空隊の、人、材共に世界第一なり、と勵聲せり、其の自信、期すること斯くの如し。

又昭和九年、倫敦會議に於て、從來纏めんが爲に、敢て不利を忍びし通念を打破し、斷乎所信を貫徹したりしが、時に米英歩を一にし、他迄日本を劣勢化せんとするや、五十六、突如航空母艦廢止を提議して曰く、吾れ戰隊司令官として經驗ありしが故に斯く主張するなり、こは人道の爲なり、と彼等をして呆然たらしむ、亦五十六の面目躍如たりと謂ふべし。

今次大東亞戰爭に於て、聯合艦隊司令長官として、先制必殺の戰法を以て、偉大なる戰果を收めつゝあるは、國家の興廢を賭したる日本海々戰と俱に、萬古不滅のものたり。

五十六、この武勳を前にし、その業績は悉く麾下の誠忠に歸し、獨り黙々、精魂を護國の重任に傾倒しつゝあるを、吾等は敬し、謝するのみ。

## 吉 見 乾 海

乾海、藩醫雲臺の嫡男、元治元年十月二十八日生る。叔父吉見平三に子なし、即ち乾海、後を襲ぐ、幼にして異稟あり。郷土千手町小學校に學び、尋で業を木村鈍叟に問ひ、明治十二年に至り東都に出で、攻玉社にて研學數年、十八年海軍兵學校を卒へ、海軍少尉に任せられしが、其の後比叡分隊長を拜し、累進し横須賀、佐世保鎮守府艦隊參謀、海軍造兵廠長に補せられ、大正四年十二月海軍中將となり、退官するや海城中學校長として力を育英に致し、子弟を教ふる諄々善く誘掖し、識るもの皆な其の人を高しとせり。

# 渡邊廉吉

諱信敬・通稱廉吉・靜堂と號す・櫓左衛門第七子・嘉永七年一月生る。

廉吉、幼にして穎悟。六歳にして富田の家塾に學び、更に崇徳館内成章堂に入り、刻苦、尋で笈を負うて東都に上り、近藤塾にて勉學、向學の氣益々旺なり、竟に第一大學區第一中學校に於て功を積み、長じて歐洲に渡り、碩學スタインの門を叩き、法律學を研修し、歸るや、牧野伸顯と俱に伊藤博文の下に在りて憲法、皇室典範其他施行上必要な諸制度の調査に従ひ、黒田清隆總理に親任せらるゝや、内閣總理大臣秘書官に任せらる、山縣有朋の内閣出づるに及び地方官廳に轉じ、自治法制の實施に盡瘁せしが、再び中央に還り、法制局參事官として、自ら體得せし經驗を基に立法事務に従事し、明治四十年行政裁判所第二部長に進み、地方議員選舉及地方制度に關す訴訟審理に當り、法學博士の學位を得、其の前後三十年間精勵を以て職務を執り、須臾も懈る所なし。大正十一年二月貴族院議員に勅選せられ名聲隆々たりしが、大正十四年二月十四日七十二歳を以て病歿す。

昭和十七年三月五日印刷  
昭和十七年三月十日發行

流芳後世  
——長岡の人々——  
〔非賣品〕

不許複製

編者兼 長岡市長 松田耕平  
發行者 長岡市長 松田耕平  
印刷所 長岡市旭町一丁目 北越時報社

發行所 長岡市役所

新潟縣長岡市大手通二丁目七二番地ノ二

419  
69

終

